EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO えど友

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

第70号
平成24年
(2012)
11 － 12

江戸東京博物館友の会会報

目次

「江戸東京たてもの園」を散策 ……1～2
えど友広小路 ……3～4
会員に聞く「五街道を踏破した 磯邉晃さん」/ 会員からの投稿「東京の路面電車」/ えど友サークルだより / えど友サークル紹介「江戸東京を巡る会」/ 友の会めも
友の会セミナー「公家・門跡の江戸参向」……5
友の会セミナー「彰義隊の墓守の子孫がみた上野戦争…」…6
学習会「文京ふるさと歴史館を訪ねる」……7
江戸博クリップ「上野と私」……7
見学会「再訪　江戸城周辺の探訪ーその３（外濠）」……8
第４回　えど友研究発表会……9
江戸名所図会を歩く…④［賀茂真淵翁閑居地から三ツ橋］…10
データで見る「友の会の構成」…… 11
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

ようやく訪れた秋の一日 「江戸東京たてもの園」を散策

広報部会内で「江戸東京たてもの園」のことを『えど友』(70号)に掲載する、と決定したあと取材担当者はなぜか一度も行ったことがない私に決まってしまいました。武蔵小金井の駅さえ降りたことがない私は、一人ではとてもおぼつかないと考え同行者を募り、結果、名乗りをあげてくれた人が菊池さんでした。彼は広報部会に入ってから日が浅いとはいえ、平成５年(1993)に「江戸東京たてもの園」ができた当初から多分40～50回「たてもの園」に通っているベテランで心強いことこのうえないガイド役でもあったのです。

９月に入っても炎天が続いたため、延ばし延ばしの日程はついに９月下旬に入り、急に気温が下がってきた25日に取材のための散策となりました。

西ゾーンから「武蔵野の道」へ

旧光華殿(こうかでん)のビジターセンター(旧所在地、千代田区、建築年・年代、昭和15年・1940)の階段をあがるとチケット売場です。大人400円ですが、65歳以上は半額、さらに江戸博友の会の会員は２割引きですから、160円を支払い、左手屋外に出ました。

真っ先に、「ドン」という愛称のあった大砲「午砲(ごほう)」に目を留め、誤報はなかったのかなと思いつつ、まず西ゾーンを歩きました。

▲旧光華殿のビジターセンター

最も安定した光をとるために窓にすりガラスをはめた常盤台写真場(板橋区、昭和12年・1937)、京都で建てられ、戦後港区に移築された三井八郎右衛門邸(港区、明治時代)、江戸時代に名主を務めた農家・吉野家(三鷹市、江戸時代後期)、式台のある玄関など格式の高さを示す八王子千人同心組頭の家(八王子、江戸時代後期)、当時めずらしい全室洋間の田園調布の家(大田区、大正14年・1925)など、このゾーンには九つの建造物があります。その他、現在復元工事中の三島邸(来年３月末完成予定)がありました。

このようにいろいろな建物を集めて設立した趣旨は、現地保存が不可能な文化的価値の高い歴史的建造物を移築・復元・保存・展示し、貴重な文化遺産として次の世代に引き継いでいくことと渡されたパンフレットに明記されています。そのほか、各種遺跡、考古・歴史・民俗資料や遺構が展示室などにあり、西ゾーンの後は「武蔵野の道」と表示された樹林ゾーンを歩きました。石で回りを囲まれた小さな古墳、今から２千年前といわれるひょうたんの形を残す住居跡、あるいは円形の住居跡、各種供養塔などがあります。

▲吉野家（農家）

昔なつかしい銭湯「子宝湯」

お昼どきになりましたので、東ゾーンにある休憩所２階の「蔵」というどん屋に入りました。うどんが専門の店ですが、お弁当もあり、それをビールとともにいただきました。このお弁当、数量限定ですが、とても割安感があってお勧めです。

東ゾーンでは下町中通りから、まるで神社仏閣の屋根のように見える銭湯「子宝湯」(足立区、昭和４年・1929)が目立ちます。中をのぞきますとなつかしい番台や、かごがあり、女湯では赤ちゃん用の体重計がありました。浴室には広大な富士山の絵が鮮やかに描かれています。ときどき、この浴槽の上が高座になって落語の催しもあるそうです。お隣は関東大震災や戦災をまぬかれた居酒屋「鍵屋」(台東区、安政３年・1856)で、小さなカウンターの向こうにねじり鉢巻のおやじさんを見る思いがしました。「万徳旅館」(青梅市、江戸時代末期)とともに最近復元された乾物店「大和屋本店」(港区、昭和３年・1928)は間口に対して高い３階建ての木造建築です。３階建てといえば、ほかには化粧品を扱っていたためでしょうか、古代ギリシャ建築様式の優雅な柱がある「村上精華堂」(台東区、昭和３年・1928)。狭いために両側の壁のほか、天井から棚が連なり、また地下室まである文具店「武居三省堂」(千代田区、昭和２年・1927)。現代風の建物といっても通じる「花市生花店」(千代田区、昭和２年・1927)など、東ゾーンには合計14棟の建物があります。

このゾーンには、建物のほかに都電(7500形)や消防署(旧下谷)の望楼上部が置かれています。また、センターゾーンへつながるところには皇居正門石橋飾電燈があり、見事な彫刻に目を奪われました。夜の開園時にはこれにも灯がともるのでしょうか。

センターゾーンは、入場したビジターセンターや二・二六事件の現場となった「高橋是清邸」(港区、明治35年・1902)、ほかの建物と違って鮮やかな色彩の「旧自証院霊屋」(新宿区、慶安５年・1652)、大名屋敷の門を再現したような「伊達家の門」(港区、大正期)など６棟の建築物があります。

▲石橋飾電燈

▲高橋是清邸

数多くある催し物

３時間余りのじっくり、ゆっくりの散策でした。急に気温が下がったため？　それとも明け方まで雨だったせい？　菊池さんが“こんなに人が少ないのは初めて”という日でしたが、なにか催し物があるときは、広場や下町中通りが人であふれるそうです。盆踊り、お月見の会、下町夕涼み、お茶会、演奏会、落語会、紙芝居あるいは各種伝統工芸の実演などなど、数多くの楽しいイベントがあるとのことでした。広大な小金井公園の一角、あちこちで赤と白のミズヒキが目を引き、ススキの穂が風でゆらぎ、赤いサルビアや紫のキキョウ、オレンジ色のキバナコスモスが秋の風情を伝えていました。散策を終えて、ビジターセンターに戻り、ミュージアムショップをのぞき、その奥にあるカフェで仕上げのコーヒーでしたが、菊池さんの“初めて”がもう一つありました。数十回来ていた彼がなんと！このカフェがあることに気付いていなかったのです。きっと、建物や催し物ばかりに目がいっていたのでしょう。

▲旧自証院霊屋

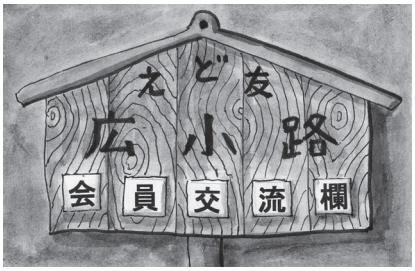
参考資料：パンフレット『江戸東京たてもの園』

【取材】文・写真：広報部会・福島信一
ガイド役：同・菊池真一

――――〔交通アクセス〕――――

◎ＪＲ中央線「武蔵小金井」駅北口②③番バスのりばから乗車して「小金井公園西口」下車(所要時間５分)、徒歩５分

◎西武新宿線「花小金井」駅北口下車、小金井街道沿いに西友前バス停４番のりばから武蔵小金井駅北口行き(武17系統を除く)に乗車して「小金井公園西口」下車(所要時間５分)、徒歩５分



会員に聞く

五街道を踏破した 磯邉晃さん

平成12年(2000)に東海道からスタートし、数年間で五街道を踏破した磯邉晃さんにお話をうかがいました。

――五街道を歩いてみたいと思われたきっかけは？

最初は、五街道をすべて踏破しようと思ったわけではなく、禅の先生故赤根祥道氏主催の勉強会「赤根塾」で出会った仲間たち23名を誘って東海道を毎月1回、2年ほどで歩いてみたいと思ったのがきっかけでした。当時アメリカの銀行の投資顧問をしていましたが、激務ですっかり身体を痛め、ドクターストップがかかりやむなく現役を退いたあと、心機一転何かをやってみたいと思っていました。東海道を歩いたあと仲間の提案もあって、気がついたら中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道と五街道すべてを歩いていました。「赤根塾」で出会った仲間や、その後ご縁をいただいた仲間たちは、私にとって永遠の「宝」です。

――磯邉さんにとって「街道歩きの魅力」とは何でしょうか？

いろいろな魅力がありますが、一口に申せば「歴史街道のあふれるロマン」とでもいいましょうか、家康も、殿様や旗本、その奥方やたくさんの町人たちも歩いてきただろう街道やそこに脈々と伝わる文化をたどることは、この上ない魅力です。どこを歩きましても「江戸の匂い」がします。それから、私は酒蔵を巡るのが好きです。そこに伝わる「銘酒」の数々は、代々の歴史をつないでいます。今でも忘れられない蔵は「美濃の御代櫻」、「福井永平寺の黒龍」、「信州の真澄」、「山梨の七賢」など挙げれば切りがないほどたくさんあります。

それぞれの酒蔵で、歴史の香りいっぱいの蔵の中を見せていただき、自慢の銘酒のお話を聞きながら、のどを潤す楽しみは格別でした。

――これからの抱負を

▲磯邉晃さん

私にとって、日本人として歴史的遺産のあるところを保存し、これからも先人から引き継がれた文化を後世に伝えて行くことが大事なテーマです。

今後も「江戸からの学び」を忘れずに、触れ合った仲間から導きを頂き、感謝の心を大事に元気に歩き続けたい、なんでも吸収しながら、1日1ミリでも良いから、前を向いて進み続けていけたらと願っています。

[追記] 磯邉さんはえど友サークル「江戸東京を巡る会」の世話人でもあります。その様子は次ページの「サークル紹介」をご覧ください。

【聞き手】文・写真：

広報部会・五十島正修

会員からの投稿

東京の路面電車

百目鬼（どうめき）喜久男

東京の路面電車は、現在では都電荒川線を残すだけとなったが、敗戦前の市街地には縦横に路面電車が走っていた。戦後の復興が進むにつれ、自動車が急激に増えて交通渋滞が激しくなったので、路面電車は撤去されて都バスに替わり、地下鉄の建設が次々と進められたのである。昭和39年(1964)の開催が決まった東京オリンピックを目指し、高速道路の建設が急ピッチで進められた。オリンピック開催をわずか5年後に控え、計画をスムーズに進めるため用地の買収を最小限に抑え、広い道路の真ん中や市街地の川や堀が最大限に利用された。江戸の中心であり日本国道路原標がある日本橋の上に、高速道路が通っている景観は、この突貫工事の結果生まれたのである。

明治22年(1889)東京府の中に15区を含む東京市が成立したが、昭和7年(1932)には市域が拡張され、35区となった。東京都制が施行されたのは戦時下の昭和18年(1943)で、戦後間もない昭和22年(1947)に区域統合により現在の23区(「編集部注」参照)となった。浅草と上野間に日本で初めて地下鉄が開通したのは、私が生まれた昭和2年(1927)のことである。私の出生当時の戸籍は、東京府東京市浅草区猿若町であった。現在の台東区は、浅草区と下谷区が合併したものである。

私の記憶にある路面電車は市電と呼んでいたから、都電に替わった時は違和感を覚えたものである。確か当時の電車賃は7銭で、早朝に現場に向かう労働者のために、早朝の往復切符は9銭だったと思う。また別系統の電車に乗り換えるときは、車両後部にいる車掌に申し出ると、乗り換え切符を発行してくれるので便利だった。

私は、南千住始発の新橋行きの市電に言問橋で乗車し、港区の旧制商業高校に通学していた。しかし私が通学できたのは4年生までで、昭和19年(1944)4月以降は勤労動員で、学生が校舎で学ぶことが許されない時代であった。

「編集部注」昭和22年3月に22区となり、同年8月に板橋区から練馬区が分離して23区となりました。

えど友サークルだより

◆**江戸東京を巡る会**：9月16日(日)「竜閑川、浜町川跡をたどる(その2)」と題して、日本橋人形町に集合、元吉原、水天宮などを経て日本橋小網町あたりまで江戸の名残りを訪ねた。参加者は46人。

◆落語と講談を楽しむ会：8月21日(火)鈴木紘一さんが月番で、上野鈴本で寄席演芸を楽しんだ。参加者は16人。9月25日(火)月番・伊東敏男さんの案内で、谷中周辺の落語ゆかりの地を散策、その雰囲気を楽しんだ。参加者22人。

◆藩史研究会：8月10日(金)国定美津子さんが「琉球藩」の研究発表を行った。神話時代から沖縄県となるまでの歴史についての詳しい発表で、一同興味深く聞いた。参加者は18人。9月14日(金)小関征三さんが「杵築藩」の研究発表を行った。「朱印状発行者が字を間違えたため木付が杵築に変わってしまった」などのエピソードをまじえ、分かりやすい説明だった。参加者18人。

◆古文書で『八大実記』を読む会：9月13日(木)、28日(金)に例会を開催。参加者は各7、8人。

◆神田川を歩き楽しむ会：8月26日(日)と30日(木)に第32回として、水道橋から聖橋まで歩いた。途中、金刀比羅神社、東洋学園大学史料室、昌清寺、東京都水道歴史館、済生学舎跡、元町公園、お茶の水分水路碑、神田上水懸樋跡碑、明治大学博物館、小栗上野介邸跡、太田姫稲荷などを参拝あるいは見学した。参加者は各25人、54人。9月23日(日)と27日(木)に第33回として、聖橋から万世橋まで歩いた。途中、湯島聖堂、神田神社(神田明神)、お茶の水おりがみ会館、滝沢馬琴住居跡、講武稲荷、国登録文化財の第一KSビル・松本家住宅主屋・山本歯科医院、齋藤月岑居宅跡、神田青果市場発祥の地、和光稲荷、一八稲荷、松尾神社などを参拝あるいは見学した。参加者は各29人、45人。

◆『江戸名所図会』輪読会：9月17日(月)会員の発表が一巡し、今回の清水昌紘さんから2順目に入った。一本松から最正山覚林寺までを読んだが、詳細な参考資料も用意されていて活発な討議が行なわれた。参加者22人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルと「落語と講談を楽しむ会」については定員に欠員が出たときに先着順で参加いただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名を記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**を希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

えど友 サークル紹介

江戸東京を巡る会

えど友サークル紹介の4回目は平成18年(2006)6月から活動している「江戸東京を巡る会」です。「江戸の味わいを楽しむ」を基本にテーマを選定し、年3、4回の町歩きを行っています。現在会員は73人とのことです。

第25回にあたる9月16日(日)は＜江戸の町、堀と川跡、歴史の足跡～竜閑川、浜町川跡を辿る＞というテーマで、日本橋人形町周辺を歩きました。通常は平日の開催ですが、今回はビジネス街のため休日開催としたそうで、参加者数は46人と過去最高でした。午後1時に東京メトロ日比谷線「人形町」駅集合後、世話人の磯邉晃さんの説明に引き続き、「玄冶店(げんやだな)」碑からスタート。ガイド役の宮俊さんの先導でかつての川跡をたどります。現在は埋め立てられて分かりにくくなっている所が多いのですが、浜町川跡の一部は遊歩道となっており、昔の面影をしのぶことができます。

また、日本橋人形町は元吉原遊郭、芝居町、寄席「末広」、芳町花街などのあった場所でもあり、これらに関連する史跡が点在して興味深いものがあります。中でも、明治7年(1874)に創立された有馬小学校(日本橋蛎殻町)の建設寄付金を浜町芸者が率先して出した、というエピソードは当時の芸者の心意気を感じさせました。

道中では参加者が江戸談義に花を咲かせている様子も見られ、和やかな雰囲気の中で町歩きは続きます。水天宮では全員が記念撮影に収まりました。

晴れ時々曇り、一時小雨という変わりやすい天候の中、午後3時前に「親爺橋(おやじばし)」跡(日本橋小網町)で無事予定終了。解散後、名残が尽きない多くの方が打ち上げ会に参加し、和気あいあいのうちに交流を深めていました。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

▲水天宮での記念撮影

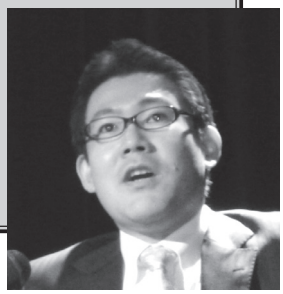
友の会めも(開催日と人数)
平成24年8月～9月

◆役員会8月14日(火)14人。9月11日(火)14人。◆事業部会8月7日(火)22人。9月4日(火)23人。◆広報部会8月21日(火)12人。9月18日(火)13人。◆総務部会8月28日(火)20人。10月2日(火)18人。◆三部会合同会議9月11日(火)37人。◆文政町方書上翻刻 プロジェクト8月2日(木)A9人、B10人。9月6日(木)A8人、B10人。9月20日(木)A7人、B10人。◆古文書講座入門編9月5日(水)午前85人・午後62人。初級編9月19日(水)午前53人・午後45人。中級編9月15日(土)午前午後合同65人。

第120回 江戸東京博物館友の会セミナー
（平成24年8月11日）

「公家・門跡の江戸参向」

講師　田中潤さん（学習院大学文学部史学科助教・史学博士）



今日は、私が普段研究している江戸時代の朝廷を構成した、公家・門跡が、どのような生活を送っていたのか、古文書や絵画等を通じて紹介していきたいと思います。

江戸時代の公家・門跡

江戸時代、京都に在住していた公家・門跡は、幕府から家領（その家の領地）等を与えられ、それに対して禁裏への小番や家業による奉仕を通じ、朝廷に仕えていました。小番とは番編成されて御所に交代で宿直し、天皇等に奉仕することです。家業とは、例えば高倉家や山科家のように、天皇の装束の作製や、着付けを自らの家の職業にしているようなことをいいます。

彼らはそれぞれの立場に応じた用向きを帯びて江戸に参向し、将軍への御礼や将軍家関係の神事・法事に参仕しました。「御礼」とは将軍に対する「御挨拶」の意味です。幕末まで137家あった堂上公家は、摂家・清華家・大臣家などの家格に分かれ、それぞれの家の先例に応じて代々の当主が官位を授けられました。なかでも武家伝奏は、摂関・三大臣に次ぐ要職であり、朝廷と幕府の窓口となる重要な職務でした。

公家の経済基盤はというと、朝廷全体では10万石といわれ、禁裏が3万石で残りを公家や門跡などが占めていました。最高は摂家の九条家で2,000石余、寄合クラスの旗本並みでしょうか。最低では30石3人扶持の蔵米支給にとどまる公家もいて、必ずしも豊かではありませんでした。不足分はその家の家職等によって収入を得るほか、借入で家計をたてていたのです。

門跡とは天皇の皇子や、世襲親王家（伏見・桂・有栖川・閑院の各宮家）の王子、摂家の子弟が住職を務めた寺院のことをいいます。江戸時代は、皇位を継承する皇太子、4つの親王家を継ぐ皇子以外は門跡寺院に入ってお坊さんにならなければなりませんでした。親王が入る宮門跡、五摂家の子息が入る摂家門跡、いずれも1,000石平均の寺領を幕府から与えられました。これに対して諸門跡は、天下泰平・玉体安穏・幕府の武運長久を祈願したのです。

このように公家・門跡ともに幕府から家領を給され、それに対して幕府、朝廷の安泰のためにそれぞれの役割を果たすことが求められたのです。江戸への参向もその一つでした。

中院通茂の江戸参向

毎年正月に将軍の年頭勅使として高家が上洛し、その御礼として禁裏から武家伝奏が3月に江戸に下向していました。17世紀中後期に活躍した堂上公家、中院通茂が武家伝奏在職中の寛文12年（1672）に残した江戸参向記録『中院通茂備忘録』からその様子をみてみましょう。

1月25日に勅使である吉良上野介が上洛し、3月6、7日に江戸到着の予定で下向するよう伝えられます。2月4日には、品川到着の日や、翌日の朝食の指示、また連れて行く供の人数、道順などを細かく聞かれ、それらの対応に汲々としていることが書かれています。出発前は道中費用や、宿の予定表、土産物の調達など準備に忙殺される様子がよくわかります。出発は2月24日。25日に宿泊した醒ヶ井宿をみると、宿での食べものや、部屋の様子・間取りなども詳細に記述されています。これは子孫が江戸参向の際に役立つようにと残しているのです。また道中、江戸からの使いの手紙が来るなど書状のやりとりもありました。一行は3月6日品川に到着。その後は幕閣との交渉、増上寺・寛永寺への参詣、能楽供応などさまざまな行事があり、23日勅答登城、25日江戸出発、4月5日京都に到着しています。江戸滞在中は伝奏屋敷に滞在し、江戸市中を出歩くには幕閣に届け出て、許可を得ねばなりませんでした。

妙法院門跡堯恕法親王の江戸参向

堯恕法親王は後水尾天皇の第十皇子で、天台宗山門派妙法院門跡の住持でした。法親王は花と絵を愛した教養人でこの頃大ブームだった立花を得意とし、漢詩文にも秀でていました。

門跡が江戸参向するのは門跡継承（継目）に対する御礼や、将軍家関係の法要が目的となります。堯恕は寛文2年（1662）に継目御礼としてはじめて江戸に参向し、翌寛文3年には日光に参向して家光の13回忌に参仕しています。

江戸に参向の折、各地の名所等を詠んだ漢詩文が、堯恕の死後『逸堂集』に編まれました。富士の名所、清見寺では雪をいただいた富士を見た感慨を「どうしてこのような富士を詩に詠まずにおられようか」という趣旨の漢詩を残しています。

おわりに

宿泊を伴う遠路の外出が規制されていた公家・門跡の江戸参向は、身分に伴う役割の遂行であるとともに、公武間における文化の交流に大きな影響を与えた事は想像に難くありません。幕府の意向を受けての江戸参向は幕末まで続きました。

レポーターからひとこと

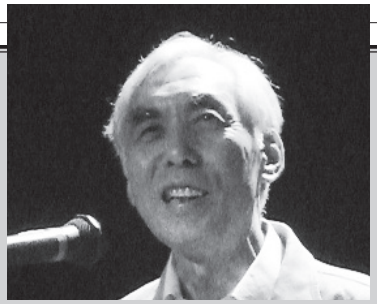
やんごとなき方々の世界における儀礼やしきたりはなんと細かく奥が深いのでしょうか。趣味と研究が一致してしまった田中先生のお話を伺っているうち先生のお公家さんスタイルが目に浮かんできました。参加者211人。

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子

第 121 回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成 24 年 9 月 29 日）

「彰義隊の墓守の子孫がみた上野戦争と上野公園」

講師　小川潔さん（彰義隊子孫・農学博士）



私は生まれてから30代半ばまで上野公園で過ごしました。私の親は上野で彰義隊の墓守をやっていました。先祖は小川椙太（すぎた）といいまして彰義隊の分隊長をしていました。慶應4年(1868)に上野戦争があり、そこから生き残り、同志の墓を建てて死ぬまで墓守を続けました。縁故者としての上野の視点をご紹介します。

上野戦争の終ったあと上野の地は上野公園になりました。その公園にある彰義隊墓所をご存知ですか。いま見ると西郷さんの像の後ろに彰義隊墓所があるようですが、本当は彰義隊墓所の前にあとから西郷さんの像ができたのです。

上野戦争の時代背景

画像は文久3年(1863)に江戸幕府が出した浪士集めの手配書です。これは彰義隊墓所にあった写しです。この文書は士農工商の身分制度を徳川幕府自身が変えて武装集団を組織したもので、まさに時代が変わる象徴ではないかと思われます。

十五代将軍徳川慶喜は慶應3年(1867)に大政奉還をして、次の年鳥羽伏見の戦いに敗れて上野寛永寺に蟄居（ちっきょ）しました。新政府の中には慶喜を死罪にすべきとの声が高まりました。そういう中で慶應4年(1868)、慶喜の一橋家時代の家来を中心に助命嘆願のグループができました。これが彰義隊の前身になっていきます。何度か会合をするうちに一橋家関係以外の人も集まってきました。やがて、新政府に対する対抗意識が強くなっていき、最終的には武力抗争をしてしまうわけです。

新政府も旧徳川幕府の要職の人たちも彰義隊には解散を勧告するのですが、新政府軍に対して小競り合いをして気勢を上げていきました。

新政府から事実上の江戸の政治を委託されていたのが旧幕府の官僚たちでしたが、江戸の治安を守るため彰義隊を公認して給料を払って警察のようにさせました。これにより、のちに彰義隊は江戸幕府あるいは徳川家の正規軍であると主張するようになるのです。

現在の上野公園に残る戦争の記憶

上野戦争で焼け残った寛永寺本坊表門が今も寛永寺の一角に保存されています。本坊とは京都から赴任した輪王寺の宮様の居室で、その扉には菊の紋が付いています。また門には大砲・鉄砲の弾の跡が残っています。

現在の彰義隊墓所は上野戦争後に彰義隊士を火葬にした場所といわれています。戦争の翌日に新政府方死者はすべて片付けられましたが、彰義隊方は見せしめのために上野の山に放っておかれました。のちに三ノ輪の円通寺の住職佛磨さんからの願いが許可されて火葬にされました。佛磨さんは灰の一部を円通寺に移し墓を建てました。

その後、寛永寺と生き残った隊士のいくつかのグループが彰義隊の墓を上野に建てたいと政府に申請しました。

最終的には1グループが自前で墓を作ることとなりました。その中に小川椙太がいて、ほかのメンバーが東京を離れたため結局椙太が一人で墓を建てることとなりました。明治8年(1875)に唐金の墓は完成したのですが、借金のかたに取られてしまいました。

小墓石は墓を建てるために掘った時に出てきたとされていて、寛永寺のお坊さんがつくったもので、初代の墓石です。現在の墓は三代目となります。

小川椙太の家系後継

小川椙太は明治28年(1895)胃病で亡くなり、その後は妻りてと娘志賀により墓所は守られました。志賀は独身のまま亡くなりましたので、りてはめいのミツを養女に迎え墓守の教育を行いました。ミツは眞平をむこ養子に迎え4人の男の子が生まれました。

長男の彰は昭和57年(1982)に生家に戻ってきて建物を建て替え、その一角に上野彰義隊資料室を設置しました。平成15年(2003)、彰はここを撤退して資料室はなくなりました。史資料のほとんどは台東区に保管されていて、それ以外の書籍や小川椙太に関する書類資料等は末弟の私、潔が保管しています。

上野公園とイメージ調査

上野戦争後、上野台地は立ち入り禁止になりますが、明治2年(1869)2月、花見直前に開放されました。

時を経て、1980年代半ばの上野のイメージに関するアンケート調査では、寛永寺も彰義隊も10位までに入りませんでした。

最後に慰霊、墓を守るということにどういう意味があるのか、自分自身もう一度考えてみたいと思っています。

レポーターからひとこと

上野公園には博物館、美術館を中心に年に5、6回訪れていますが、彰義隊の墓はその場所にあることは知っていても内容は理解していませんでした。次回上野公園に行く機会には本セミナーを思い出しながら、ゆっくりお参りしたいと思います。参加者は105人。

【記録】文・写真：広報部会・天野哲夫

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成24年8月21日）

文京ふるさと歴史館を訪ねる

友の会の新企画、学習会がスタートしました。この学習会は、「江戸東京博物館」の外へ飛び出し、ほかの博物館や団体の門をたたいて江戸に関する講義をお願いし、江戸の知識をレベルアップしようという企画です。記念すべき第１回は「文京ふるさと歴史館」を訪問し、解説をいただきました。

「文京ふるさと歴史館」は平成３年(1991)４月に本郷４丁目に開館し、文京区指定文化財を５点、そのほか約500点に及ぶ民俗品を保有しています。その中で最も代表的な作品が、今回のテーマ『高崎屋絵図』です。この絵図は、文京区の区指定文化財でもあり、長谷川雪旦とその息子の長谷川雪堤によるもので、本郷追分に江戸中期からあった高崎屋の当時の様子が描かれています。長谷川雪旦といえば、あの名高い『江戸名所図会』の挿絵を描いた絵師であり、息子の雪堤も『東都歳事記』の絵師ですから、そんな売れっ子に絵をかかせる商家とは、どれほどのものだったのでしょうか。

齊藤智美学芸員により、さまざまな角度による分析と考察が紹介されました。

まずは高崎屋に関する記述がある『御府内備考』から入り、『俗事百工起源』の文章、そして、『高崎屋絵図』の絵図上に記された内容など、古文書の一部を抜粋して解説します。聞き入る方でも古文書の文章を読みこなそうとしている人が多く、さすが友の会の会員は違うと誇らしくなります。高崎屋は、当時、酒といえば上方が良しとされましたが、上方から来る酒でも、売れない名の知れない酒を集め、「江戸一」というブランドをつけて販売しました。それが大ヒットして、高崎屋は財をなし、さらにしょうゆやろうそくの販売、両替屋まで手広く商売をしていたそうです。

次に、絵図の細かな部分を拡大して店先や家屋、通りを行く人、生活風景、庭先や作業場まで様子を分析をしていただきました。

俳諧もたしなみ、号までもっていた高崎屋の主人は、山水もある庭園を自宅に造り、その繁栄ぶりがうかがえます。

齊藤先生の説明によると、そんな高崎屋を襲ったのが天保の改革、贅沢禁止令です。せっかく建てた大邸宅の取り壊しを命じられてしまいます。お上の命に素直に従い質素節倹に努めることにするが、祖先の功業を子孫に伝えるために、取り壊しの前にその豪華な庭園の絵図を後世に残すことにしようと、ごひいきの絵師、長谷川雪旦と雪堤に描かせたのが『高崎屋絵図』だったのです。先生いわく、「天保の改革のお陰で、この絵図ができたとも言えます」。

最後に、２階展示室に移動し、実際に絵図を鑑賞しながらの説明になりました。またほかの掛け軸では、裏に張り付けられた当主の遺言を特別に拝見させていただくなど、通常では目にすることができない特典もありました。この展示室にはほかにも江戸から東京にいたる文京区の歴史資料があり、参加者は鑑賞を楽しんでいました。

博物館に立ち寄るだけではわからないことが多いですが、専門家による貴重なお話を拝聴し、学習会の成果はあったようです。文京区には武家屋敷や昌平坂学問所の跡もあり、そうした所へ立ち寄りながら帰途につけるのも、この学習会の魅力でしょう。私たちは、現在も東大前で営業を続ける高崎屋まで歩いて位置を確認し終了しました。参加者33人。

江戸博クリップ

「上野と私」

学芸員　　我妻直美

『えど友』第67号でこのテーマが募集されていたので、私も参加させていただこうと思う。

私は10歳の時から神奈川県に住むが、母方の明治生まれの祖父を筆頭に、私の一族はずっと上野の不忍池辯天堂の辯天様(と我が家ではお呼びする)をお参りしている。お参りを始めた当初は文京区に住んでいた祖父母たちだが、杉並区を経て、30年以上前に神奈川県に引っ越した。祖父母はとうに他界したが、母と父は、今も毎月欠かさず初巳の日(その月最初の巳の日で辯才天の御縁日)に辯天堂に参詣している。

私も小さい頃は、毎月辯天堂でお坊さん達の読経の声に耳を傾けながら、御堂の天井画を端からじっくり眺めるのが常であった。大きくなってからは、初巳の日に参詣することはほとんどなくなったが、毎年の初詣はもちろん、人生の節目には必ず辯天堂に出向く。また願いごとがあれば手を合わせ、そして願いが叶えばお礼参り。

当然、周囲に関わる思い出も多い。

不忍池の前から祖母と一緒に乗った都電、初めて行った展覧会はもちろん上野。動物園のモノレールや精養軒のベランダから眺めた、不忍池と辯天堂の時を越えた風景。そして我が家の受験を控えたお正月は、辯天堂から湯島天神に回るのがお決まりのコースだ。しかしいつの頃からか不忍池にユリカモメが増え、冬になっても池の水があまり凍らなくなったのが少々気になる。

上野に暮らしたことはないが、私にとって上野の不忍池の辯天堂は、まさに心の故郷なのである。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成24年9月30日）

「再訪　江戸城周辺の探訪 ―その3（外濠）」

9月30日(日)、JR中央線「御茶ノ水」駅聖橋口に集合、台風17号接近で途中切り上げありを確認し、第1班は11時50分に出発。まずは石造りの聖橋から見学、関東大震災後架けられ、橋名は神田川を挟んだ湯島聖堂と聖ニコライ堂に由来とか。

▲聖橋

40年かけて神田台が外濠に

神田台は江戸城本丸台地と同じくらい高いため家康が神田山を崩し、土は日比谷入江埋めたてに使いました。元和2年(1616)治水対策も兼ねて台地を削り平川の水を引いた神田川は、寛永13年(1636)、外濠の一部として完成しました。仙台堀は元和6年(1620)、秀忠が伊達政宗に命じ神田川を掘削して作らせたもので「御茶ノ水渓谷」「茗渓」とも呼ばれます。お茶の水坂を右折した高台が元町公園です。今は本郷に移転した高林寺があって境内の「御茶水」の井戸が江戸図屏風にも描かれましたが、井戸跡は見当たりませんでした。お茶の水橋・水道橋中間の神田上水懸樋(かけひ)跡は、江戸初期、井の頭池を水源とした上水を渡す懸樋が設置された所です。江戸博の常設展示室には水溜めや樋の実物・模型が展示されています。

▲神田上水懸樋跡

神田川両岸は大名屋敷が

「水道橋」駅横から日本大学に及ぶ講武所跡は幕末の武芸講習所で、勝海舟・大村益次郎ら幕臣が教授陣でした。高松藩松平讃岐守邸は神田川を挟んだ水戸殿邸の対岸にあり、今は説明板のみで企業ビル等が建っています。小石川橋から黒瓦でふいた白壁を右に進み、小石川後楽園を訪れました。入園せず水戸家等の説明板を見、森林浴気分で小休止。水戸殿邸跡は東京ドーム、文京区役所も含み、庭園部分が小石川後楽園です。外堀通りを「飯田橋」駅たもとで右折し、軽子坂から神楽坂へ。石畳の小路で、京都の茶屋町の趣きで

▲小石川橋から小石川後楽園へ

した。本多横町を抜けると毘沙門天を祭る家康創建の善国寺です。こま犬の代わりに石寅が座っていました。

大通りは参詣人向けの店が軒を並べ、今も昔もお祭のようなにぎわいです。

牛込門から外濠公園へ

JR「飯田橋」駅西口の牛込橋には寛永13年建造当時の石垣や「阿波守」の文字が刻まれた大石が残されています。石に穴を開け潮の干満を利用し川に浮かべて運び込んだそうです。牛込門を右折、外濠公園に入ります。四谷門あたりまでが松も交じる桜並木の公園です。左側には板倉内膳正邸跡の東京逓信病院、法政大学など。右側は土手、下りきった所はJR中央線、その下に、折からの日射しを受けて緑色の水を満々とたたえた外濠が光っていました。

▲神楽坂善国寺

富士見坂から市ヶ谷門へ

富士見坂は桜も松も濠も富士山も見晴らせ、さぞ絶景だったことでしょう。

新見附橋の両側に外濠を見つつ、外堀通りへ下り、右折すると「市ヶ谷亀岡八幡宮」の門柱が見えます。茶ノ木稲荷神社を横目に「男坂」を上ると拝殿。文明8年(1476)太田道灌が鎌倉鶴岡八幡宮を勧請・創建したので亀岡を付けることもあり、

▲市ヶ谷亀岡八幡宮

江戸期は門前に町屋が並び、有数の歓楽街でもあったとか。八幡宮の左側から見下ろした尾張殿邸跡は防衛省の構内です。

寛永13年築の市ヶ谷門は桜門とも呼ばれ「市ヶ谷御門桜台」の石垣に往時がしのばれます。約3時間半、8km余りの行程を雨なく終え、JR中央線「市ヶ谷」駅前で解散しました。参加者129人。

レポーターからひとこと

坂と橋の多い「御茶ノ水」～「市ヶ谷」　4駅間を、縫うように歩きました。現在の軌道は江戸の外濠も利用して造られたのでしょうか。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・中村貞子

第４回　えど友研究発表会（平成 24 年８月７日）

会員が日頃の研究成果を披露

第４回の研究発表会が８月７日（火）に，江戸博1階の学習室で開催されました。
今年も多彩なテーマで３氏が，日頃の研究の成果を発表しました。参加者は71人でした。

１．『おくのほそ道』「室の八島」について～

松本美智子さん

皆さまおなじみの『おくのほそ道』は、記録性の高い紀行文や旅日記と思われがちですが、実はフィクションとしての「紀行文学作品」なのです。

それは、芭蕉に同行した俳人「曽良」による『曽良随行日記』との比較で明らかです。その意味で、「室の八島」は、『おくのほそ道』において興味深い位置付けを持っています。

「室の八島」は、現在の栃木市惣社町にあった下野の国の総社、大神神社であり、そこにある池からは絶えず水気が煙のように立ち上がっていたのを、かまどから煙が立ち上るのに見たてた、平安時代からの「歌枕」の名所として有名な場所でした。ところが、「室の八島」には芭蕉の句や文章はなく、『おくのほそ道』唯一の特殊な章段となっています。なぜ詠まなかったのか？　それでもなぜここを取り上げたのか？　それは、作品の構成上必要だったからだと考えられます。貝原益軒が貞享２年(1685)に著した『日光名勝記』には、「今では、水が枯れ煙もたたない」と述べています。歌枕に対する期待を裏切るものでしたが、ここを取り上げたのは芭蕉が「室の八島」を日光東照宮への露払いの役割として、また歌枕の名勝地として最初から入れる予定をしていたからと考えられます。そのほか、日付が二つの作品では大きく違っていてここでもフィクションだと気が付きます。『おくのほそ道』は、まさに奥が深く、これからも楽しみながら、研究を続けて行きたいと思っています。

２．『カスリーン台風水害点描』を読み解く

寺島玄さん

「カスリーン台風」は、昭和22年(1947)9月19日に関東地方を襲い、戦後治水史上に残る甚大な被害をもたらした台風です。この台風による死者は1,529人、罹災者は40万人を超え、被害総額は70億円(現在の1兆3,000億円)に上りました。『カスリーン台風水害点描』は、この「カスリーン台風」に被災しながらも救済活動の最前線に立った一青年によるこん身の手記です。私はこの手記を葛飾区の図書館で発見し、読み解くうちにこれを世の中に発表し、今後の防災の一助になればと思いました。

書き記したのは、葛飾区上平井地域在住の消防団員 横田實氏。19日の朝11時の「桜土手」決壊から21日の救済活動が一段落するまでの不眠不休の活動や情景が、原稿用紙80枚分の字数で大学ノートに手書きで克明に記されています。私がこの手記を高く評価する理由は、単なる水害の状況を記しただけでなく、苦労する避難住民の赤裸々な様子や市民感情を見事に描き出している文学作品でもあるからです。

戦後葛飾に多大な被害をもたらした「カスリーン台風」を体験された方も少なくなりました。私は今後とも各地で「語り合う会」を開催し、貴重な体験が風化しないよう、そして今後の地震や洪水に備えて「防災を通じたまちづくり」を推進したいと願っています。

３．元文期豊後節停止事件～その政治的背景～

富士松松栄太夫さん

豊後節停止事件とは、水野備前守勝彦が南町奉行就任早々の元文４年(1739)９月、町年寄奈良屋を通じて豊後節の歌舞伎芝居出語り差し止めと稽古場閉鎖を命じ、年番町名主等が豊後節に染まらぬよう申合せした事件です。吉宗による改革が進む江戸へ、上方浄瑠璃語りの宮古路豊後掾が一門と子供芝居一座を引き連れて乗り込んできた享保期末は、米価高騰と大飢饉により江戸最初の「打壊し事件」や疫病流行に見舞われるなど、世情不安の状況にありました。幕府財政改善の各種政策が次々打ち出された一方、行き詰まり現象も明らかになる中で、上方から発した男女心中が名古屋を経由して江戸にも入り込み、豊後節がさらにこうした世情不安を助長させたと断じられたのです。

豊後節の人気は江戸を席巻するほどで、元文２年(1737)頃には、支配階級たる武家社会の女性までをも引き込み、その中に町奉行の娘までが含まれていたことは豊後節にとって不運な状況だったと言えます。実処分はこれ以上帳外の民の芸能に冒されないよう、町年寄を通じた「説諭」であり、武家社会の綱紀粛正が本旨だったと見なされますので、過去論評に不足していた当時の政治経済政策の影響ならびに実演奏面からの解明を追加しました。

【記録】文・写真：広報部会・五十島正修

江戸

名所図会を歩く…④

［賀茂真淵翁閑居地から三ツ橋］

山王日枝神社

『江戸名所図会』の編さんを思い立ったのは代々神田雉子町の名主を務める斎藤家の九代目で月岑の祖父である斎藤長秋です。長秋は『都名所図会』をはじめとする名所ものの刊行が相次いだのに刺激を受け、江戸のあちこちを訪ね歩いて書きためていたものを世に出す決意をします。

7月末の猛暑がいったん収まった涼しい日、前回の最終地点吉原町旧地から5分ほどの賀茂真淵翁閑居地から訪ねてみました。

賀茂真淵翁閑居地から新大橋

末広神社から久松警察署前を経て、清洲橋通り久松町交差点に出ます。角のファミレスの壁に「賀茂真淵県居の跡」説明板があります。実際の場所は北東に100ｍほど離れたあたりのようですが、九月十三夜の月を愛でる歌会を催したというような往時の風情はみじんもありません。そこから東、浜町公園を抜けて新大橋へ向かいます。

この橋は両国橋に次いで隅田川に架かる三番目の橋として、元禄6年(1693)に架けられました。深川萬年橋北詰、芭蕉稲荷のあるあたりに住んでいた芭蕉もこの橋の架かるのをよほど楽しみにしていたらしく、橋が建設中の元禄5年(1692)には

初雪や　かけかかりたる　橋の上

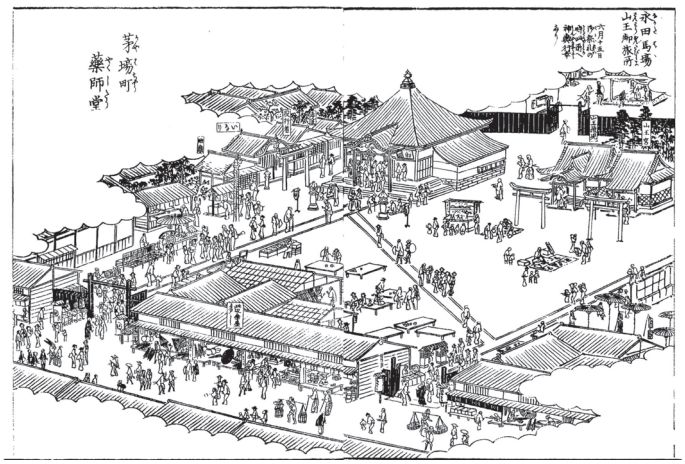
おなじく橋が完成したときには

ありがたや　いただいて踏む　橋の霜

という句を残しています。そのときの橋は現在よりも100ｍほど下流で、芭蕉記念館を少し過ぎた交差点近くに旧新大橋跡の石碑がたっています。新大橋から下流の清洲橋方向、「浅草川と箱崎の間の流れとの分かれ流るる所」あたりは三叉と呼ばれ、月見の名所として名高いところでした。

江戸橋から鎧の渡し

新大橋を渡り直して中央区側に戻り、江戸橋を目指します。途中は前回訪れた吉原町旧地をぶらぶら行ってみました。現在の江戸橋は元の場所から少し離れて、昭和通りの一部となっています。図会の頃江戸橋と日本橋の間、川の南側には毎月四の日に市が立つ四日市と呼ばれた通りがあって繁盛していたようです。橋を渡って日本橋郵便局脇を日本橋川に沿って鎧橋へ向かいます。この橋のたもとに鎧の渡し跡説明板があります。茅場町牧野家の後ろから小網町への船渡し場で、その名の由来は源義家奥州征伐の故事にちなんで鎧が淵と呼ばれていたことにあります。ここへ来る途中に、明治11年(1878)東京株式取引所が設けられるにあたって鎮守として造営された兜神社があります。この境内にある兜岩は「同所海賊橋の東詰牧野家の庭中にあり」とされた兜塚と場所が一致し、源義家の故事とも符合します。見つけた時は「やった！」という気分でした。



▲長谷川雪旦　永田馬場山王御旅所・茅場町薬師堂

永田馬場山王御旅所から俳仙宝晋齋其角翁宿

鎧橋から八丁堀方面に向かう平成通りと永代通りが交差する手前、左側バス停のあたりに永田馬場山王御旅所(現山王日枝神社)があります。寛永年間に山王の御旅所となり「隔年六月十五日御祭礼にて永田馬場の御本社より神輿三基此所に神幸あり」と、たいそうな行列であったようですが、現在の神社にその面影はありません。ここのこま犬は大きく胸を反らして天を仰いでいるのがユニーク。本殿脇を抜けて裏手から外に出ると左手に智泉院が見えます。「かやば町のお薬師さま」とあるので、図会で「同じく御旅所の地にあり」という薬師堂の別当寺のようです。茅場町薬師は毎月8日と12日に縁日が開かれ、特に植木市がたいそうにぎわったとあります。宝井其角と荻生徂徠がこのあたりに住んでいたとされ、永代通りに面した銀行の前に其角住居跡の石碑がありましたが、徂徠の碑は見つかりませんでした。

伊雑太神宮から三ツ橋

平成通りをさらに八丁堀方面に進み、右に折れた小路に天祖神社があります。狭い境内に八丁堀三丁目西町会が昭和58年(1983)に御鎮座350年を祝し、後世に御鎮座の経緯を伝えるために立てた立派な石碑がありました。宝暦元年(1751)、名主長澤次郎太郎による伊雑太神宮御縁起が刻まれています。今では小さな神社ですが、地元の人が誇りとしているのが伝わってきます。天祖神社の石柱の裏側には伊雑宮分社と彫られていました。

桜橋交差点、鍛冶橋通りを右に曲がると弾正橋が見えてきます。今は弾正橋だけが残っていますが、図会の頃、楓川と八丁堀の交差するこの所には弾正橋、牛の草橋(白魚橋)、真福寺橋と三つの橋がコの字型に架けられ、三ツ橋と呼ばれていました。明治11年(1878)に架け替えられた弾正橋は国産の鉄による日本最初の鉄橋で、今は江東区富岡八幡宮の裏手に保存され国の重要文化財となっています。現在、弾正橋の両側には公園が整備され、その鉄橋のモニュメントが設置されています。

【取材】歩いた人(文・写真)：
広報部会・中村貞子

データで見る 友の会の構成

本年８月末現在の友の会会員構成をご紹介します。

表１ 〈男女別〉

	24年8月末		23年8月末	
	人数	%	人数	%
男性	1,054	67.1	1,100	67.5
女性	514	32.7	525	32.2
不明	4	0.2	4	0.2
計	1,572	100.0	1,629	100.0

表２ 〈年代別〉

	24年8月末		23年8月末	
	人数	%	人数	%
30歳未満	5	0.3	8	0.5
30代	25	1.6	30	1.8
40代	87	5.6	93	5.7
50代	178	11.3	213	13.1
60代	582	37.0	614	37.7
70代	511	32.5	479	29.4
80歳以上	124	7.9	132	8.1
不明	60	3.8	60	3.7
計	1,572	100.0	1,629	100.0
平均年齢	66.3		65.8	

表３ 〈住居地別〉

	24年8月末		23年8月末	
	人数	%	人数	%
23区	821	52.2	855	52.5
23区以外	192	12.2	165	10.1
（東京都計）	(1,013)	(64.4)	(1,020)	(62.6)
埼玉県	143	9.1	174	10.7
千葉県	224	14.3	236	14.5
神奈川県	96	6.1	105	6.4
（3県計）	(463)	(29.5)	(515)	(31.6)
その他	96	6.1	94	5.8
計	1,572	100.0	1,629	100.0

表４ 〈入会年次別〉

	24年8月末		23年8月末	
	人数	%	人数	%
2001年入会	150	9.6	171	10.5
2002年入会	54	3.4	64	3.9
2003年入会	95	6.0	106	6.5
2004年入会	69	4.4	75	4.6
2005年入会	88	5.6	101	6.2
2006年入会	144	9.2	168	10.3
2007年入会	173	11.0	194	11.9
2008年入会	194	12.3	222	13.6
2009年入会	144	9.2	182	11.2
2010年入会	138	8.8	194	11.9
2011年入会	161	10.2	152	9.3
2012年入会	162	10.3		
計	1,572	100.0	1,629	100.0

催事案内

古文書講座

各編とも来年１月から第３期を開講

各期ごとに改めてお申込みいただくことになっておりますので**ご注意**ください。自動継続ではありません。なお、現在人数に比較的余裕のある中級編の受講はおすすめです。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教)
- 開催日：1/9(水)、2/6(水)、3/13(水)

◆初級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/16(水)、2/20(水)、3/27(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/19(土)、2/16(土)、3/16(土)

- 時間：各講座とも　午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時

(注意)各講座とも、午前の講座か午後の講座かの希望を明記してお申込ください。

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも11月30日(金)必着

◆第２期の残日程
入門編11/7(水)、初級編11/28(水)、中級編11/17(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展「尾張徳川家の至宝」

◆徳川美術館(名古屋市)が所蔵する尾張徳川家ゆかりの作品から、刀や鉄砲などの武具類、茶の湯・香・能などの道具類、和歌や絵画、楽器など教養に関わる品々など、御三家筆頭の名門大名家の歴史と格式を示す名品約230件を展示する特別展です。担当の粟屋朋子学芸員による「見どころ解説」をお願いしています。この日は、期間限定の国宝『源氏物語絵巻 柏木三』(1/2～1/15展示)、国宝『初音蒔絵具桶』(1/2～1/27展示)も特別公開していますので、ご期待ください。

- 開催日：1月11日(金)17時～19時
- 申込締切：12月17日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第124回　「古文書に見る忠臣蔵の真相」

講師　吉田豊さん(生涯学習インストラクター・古文書)

◆「忠臣蔵」で知られる「赤穂事件」に関して、残されている記録類を読んでその真相を確認することは有意義なことです。今回は松の廊下刃傷事件を取り上げ、関係者の証言を確かめるとともに、この報告に接した朝廷側の意外な反応から、事件発生につながる遠因が桂昌院叙位問題に潜んでいるとの推理を披露していただきます。十分な根拠史料が見つからないため、小説扱いにしかなりませんが、忠臣蔵の真相に迫る一つの見方をご紹介いただきます。

○講師略歴：よしだ・ゆたか
昭和8年(1933)福島県生れ、国学院大学文学部卒、陸上自衛官を経て、50歳から江戸文芸を趣味として林美一氏に師事、現在生涯学習インストラクター(古文書)。著書は『寺子屋式古文書手習い』などかな読みに始まる古文書入門書5冊、『古文書で読み解く忠臣蔵』(以上柏書房)、『江戸のマスコミかわら版』(光文社)など。

- 開催日時：12月22日(土)14時～15時30分
- 申込締切：12月13日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

見学会

「広重『名所江戸百景』周辺探訪 ―その７（日本橋南・銀座周辺）―」

◆広重『名所江戸百景』は安政期の江戸の四季、風景、風俗などをこまやかに描いた作品集です。この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。今回は、呉服橋から日本橋南～京橋～数寄屋橋～日比谷まで歩きます。江戸時代、呉服橋の北の一石橋からは日本橋、江戸橋、常盤橋、呉服橋、鍛冶橋、道三橋、銭瓶橋が見え、自分のいる橋を加えて八つの橋が見えたという『八ッ見のはし』絵や、猪の肉を「山くじら」とした看板やさつま芋を丸焼きにした焼き芋の味は栗(九里)より(四里)うまいというわけで九里プラス四里で十三里としゃれた「○やき十三里」の看板が目を引く『びくにはし雪中』絵などを訪ねます。所要時間は約3時間、東京メトロ日比谷線・千代田線「日比谷」駅付近で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『八ッ見のはし』『日本橋通一丁目略図』『市中繁栄七夕祭』『京橋竹がし』『びくにはし雪中』『山下町日比谷外さくら田』

- 開催日：11月25日(日)12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します 。
- 集合場所：東京メトロ東西線「大手町」駅B8a地上出口(朝日生命大手町ビル前)
- 申込締切：11月15日(木)必着
- 定員：150人、同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】 山本隆(事業部会)

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、郵便番号、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「維新の洋画家一川村清雄」

会　期　10月8日(月・祝)～12月2日(日)
休館日：毎週月曜日
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「尾張徳川家の至宝」

会　期　1月2日(水)～2月24日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし1月14日、21日、2月11日は開館)。2月12日(火)は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●企画展 「徳川家康の肖像 ―江戸時代の人々の家康観―」

会　期　10月6日(土)～11月25日(日)
休館日：毎週月曜日
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●次回企画展 「浮世絵の中の忠臣蔵・江戸っ子が憧れたヒーロー」

同時開催

「縁起物描かれた笑い展 ～笑う門には福来たる～」

会　期　12月11日(火)～1月27日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし12月24日、1月14日、21日は開館)。12月25日(火)から1月1日(火)まで休館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

会報＜えど友＞第70号
平成24年11月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、前田太門、五十島正修、菊池真一、竹中裕見子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910